本を書くのに、１冊の本に、テーマは一つでなくてはならないとの鉄則があるそうです。

実は、この本には、２つのテーマがあり、ます。

１番目のテーマは、「理科で遊ぼう会」の活動を伝えるものです。

第２は、その活動が実り、その心意気を持った若者が、仕上げのゴールとも云うべき大学に入る時、

今の日本の大学は、そこで、学ぶにふさわしいものになっているのか」を問いたいと思います。

これが第２のテーマです。

この２つがセットになって、この本の論旨を構成しています、

『僕の就職先」

僕が就職したのは、高度成長が始まる直前。

僕は、大学院修士課程を終え、電力中研と云う「全国の電力会社の共同出資」の研究所に就職しました。

この時、同じ研究室に、これから、しばらく、話の中心になる、工業高卒の、K.T君も配属されました。

我々２人は、年齢差はあるものの、同期と云うことで、まとめて、同じ研究室の先輩研究員に

預けられ、研究室での生活をスタートさせました。

『研究課題』

電力会社は、遠く離れた水力発電所や、火力発電所、都市近郊の変電所などを通信回線を介して

中央の本社から、統一的に遠隔制御しています。

配属された、我々の研究室は、電力会社のこの制御のための通信を研究対象とする部署です。

当時、通信の方式が、アナログから、デジタルへ切り替わる時期で、電力会社の自前の通信回線が

デジタル信号を伝送するのに、十分な信頼性があるのか、デジタル信号伝送の信頼度を上げるには、

どうすればいいのかが、我々に課された主要なテーマでした。

先輩研究員に、２〜３年、面倒をみてもらった後、我々は、独立しました。

我々は、タッグを組んで、仕事をすることになりました。

行きがかり上、年上の僕が、彼の上司で、彼が、部下と云う形で。

仕事（研究テーマ）は、全国の各電力会社から、直接、持ち込まれる「依頼研究」と、

自分である程度、裁量できる「自主研究」がありました。

『非凡な才能』

僕は、電気工学科、K.T君は、電子工学科出身で、同じ電気です。

僕の方が年を食ってるいるだけ、色々な知識はあったり、研究レポートの書き方を

知っているとか」ありましたが、彼の電気の知識や、本質的なところを洞察する能力には

並々ならぬものがあり、素質的には、彼の方が一枚も二枚も、上であることを強く感じました。

彼は、高校時代、当時、一般家庭に普及し始めたテレビ（＝真空管式です）を修理するアルバイトを

してたと聞いて、驚いたことを覚えてます。

目には、見えない電気の回路を、僕ら一般の技術者は、計算してみるとか、

オシロスコープで電流波形を見て、理解しますが、

彼には、電気の流れがそのまま見えているのではないかと、思えるほどです。

『僕らの仕事』

彼のような有能な相棒を得て、僕の仕事は、順調で、「依頼研究」もこなし、

「自主研研究」で、何本かの学会発表論文を出すことができました。

自主研究では、アイディアを出し、そのアイディアを具体化した実験装置を作り、

それを電力会社の現場に持ち出し、現場で、実証実験を行うことをよくやりました。

自主研究の元になるアイディアは、僕が出すものの、その具体化のための実験装置の設計や、

実証実験用のプログラムに、彼は、才能を、遺憾なく、発揮してくれました。

彼と連名の学会論文提出に際しても、たまたま、僕が年上なので、トップネームは、

僕になっているものの、彼の寄与は、大きなものがありました。

論文審査で、査読意見が付いて、戻ってくるものについても、２人で、あれやこれや、

議論しながら、彼が追加のデータを集めてくれたり、技術的論述の補強をしてくれたり、

大いに、助けらました。

『学位論文』

僕のいた研究所では、ある程度の研究実績がたまると、それを元に、自分の母校へ

学位取得を申請するのが慣例になっておりました。

慣例にならって、僕も、学位論文の原稿を持って、母校に老教授を訪ね、学位取得を

お願いしました。

彼は、中身よりも、先に、巻末の参考文献を見て、「学会論文の数は、足りているな！」と

言って、論文審査を直接に、担当する教授を呼び、「君、これを見てやってくれ！」と言われ、

学位取得の第１関門を、あっけなく、通過しました。

K.T君と共著の、学会論文が、僕の学位取得の大きな原動力になったと云うことです。

『K.T君の大学進学』

さて、これからが本題で、彼＝K.T君のことです。

彼は、研究室での生活がある程度、落ち着いた、就職してから、何年か経ったところで、

勤めを終えてから、夜間の大学に通うようになりました。

この研究所では、高卒の人には、それを勧めていたこともあって、他の何人もの人も

同じように大学に、通い始めていました。

ところが、あの驚くべき才能、能力を持った彼が、何年たっても卒業できないのです。

勉強しないのとか、不登校とかでは、ないのです。

『白紙の答案に合格点は、出せない』

僕は、「そんなはずはない！、何かの間違いだろう」との思いから、その大学に、

担当教授を、訪ねたことがあります。

試験が全くできていない＝白紙を出すことが多い」とのこと、

白紙の答案に合格点は出せない。」＝残念ながら仕方がないとのことでした。

帰ってきて、彼に聞いたところ、やはり、わからにことに、解答は、できない」と

言います。

「君ねぇ、大学の先生は、忙しいのだから、問題が解ったときは、なるべく簡潔に、

相手に、解ったことを、伝えればいいのだし、わからなかった時は、

あぁでもない、こうでもないと、多くの字句を費やして、解答すれば、先生も、

何やらわけわからんこと、これだけ書いたのだから、点数を少し、与えるか！」と

大学での試験合格の秘訣を伝授したのですが、彼は、受け付けてくれません。

『いい加減な答案で卒業した僕』

大学一年生、教養課程の物理の期末試験で、僕は、出された問題の意味がわからず、

したがって、問題の解きようもなく、試験時間の一時間の間することがなく、暇でヒマで

困ったことがあります。

当然、その年の単位は、取れませんでした、大学を卒業しているところを見ると

次年度、そんな難しい物理も、（不思議なことに）なんとか、

取れたのでしょう。（覚えていませんが）

研究所に同期で入った、東大の物理出身の同僚がいたので、彼に「俺は、大学の物理の試験で

出された問題の意味が解らなくって困ったよ」と言ったら。

東大の物理出身の彼が、「自分も物理の試験で、意味がわかない問題があった」と

言って、「その時、意味を解って問題を解いた連中は、東大の教授になっている」と

言って、笑ってました。

『８年かかっても、卒業できなかった K.T君』

その後も彼は、白紙答案を出し続けたらしく、結局、大学留年リミットの８年間大学に

通いましたが、卒業できず仕舞でした。

最後の方になれば、卒業できないと見れば、授業料など、払う必要ないと思うのですが、

そこが、彼の律儀なところで、８年間分の授業料は、きちっと払って、退学しています。

その間、彼と同期で、研究所に入った高卒の何人もが、大学を卒業しています。

公平に見て、能力や、勉学に取り組む態度は、彼の方が遥かに「上」と思うのですがね。

『その後のK.T君』

彼は、その後も地道にコツコツと、努力を重ね、物事を基本的、根本的なところから、理解しようとする態度は、変わらず、僕だけでなく、先輩研究員を含め、周りから、一目も、二目も置かれる存在になりました。

大学が、その受け皿として体をなしているか、甚だ疑問である。